

公立大学法人山口県立大学 附属

郷土文学資料センターだより

第12号 2008年11月20日

やまぐちスタディーズの誕生へ向けて

シャルコフ ロバート (国際文化学部准教授)



姉妹大学からの留学生は年々増え、本学の国際化が進んでいる中、「英語で開講される科目」に注目が集まってきた。平成12年の7科目が、現在は19科目となり、欧米出身の留学生や留学を考えている本学部生が履修している。

しかし、この数年間こういう科目を運営する上でいくつかの課題が出てきた。まず、すべての講義を支える中心的な授業がないうえ、留学生はせっかく歴史的・文化的遺産が沢山残っている「山口」に長期滞在するにも関わらず、それらに出会えず帰国してしまうことが、この地に長く滞在している外国人としての私にとっては最も気にかかった。そこで、そういった遺産を教材にし、またその遺産を有する地域を教室とし、そしてその遺産について一番詳しい地域の歴史や郷土文学の研究家を教師とすることができないかと考えていた。

と丁度その時、NHK山口放送局から中原中也の誕生100周年記念の番組作成の話があった。番組では中也の詩の魅力は外国人にも通じるかどうかという趣旨となっており、留学生とある詩人が中也の詩を朗読しながら彼の跡を辿るという内容だった。NHKと本学の留学生とのパイプ役に努めると同時に通訳として番組に出演した。番組ではまさに私が考えていたようなことが展開されており、とてもよい刺激になった。また、

番組を通して詩人の佐々木幹朗さんとの出会いに恵まれた。本学で同じようなことを授業として展開しようと考えているという話をしたら、協力をしてくれることをすぐに約束してくださった。

しかし、授業として展開するには一人ではできないと感じ、日本近代文学専門のセンター員・加藤禎行及び異文化理解の専門の岩野雅子と授業開発プロジェクトを立ち上げた。加藤氏が担当している日本文化論bの一部である「近代文学」の時間を利用し、中也及び加藤氏が提案してくれた小説家の嘉村礒多を取り上げることになった。両作家について講義を2コマずつした後、文学散歩を通してそれぞれの作品や生涯に対する理解を深める形をとった。中也については佐々木氏、礒多については加藤氏と礒多研究家の多田美千代氏が担当された。岩野氏は作品における日本の伝統や文化を学生に事前に指導をされ、シャルコフは翻訳（朗読劇「子守唄よ」、小説「神前結婚」）・通訳及び企画を担当した。授業は留学生にとっても本学や外部の教員にとっても好評に終わった。

この経験をベースにし、海外の大学で進められているラーン・オン・ロケーション（現地で学ぶ）の手法を参考に、「英語で開講されている科目」に山口に適したコア授業を構築し、取り組むことにした。この取り組みは国際化加速プログラムとして文部科学省で採択され、今年度から本格的なスタートへ向けての準備が始まった。完成したら、山口の「歴史」、「文学・芸能」、「文化交流」、「クラフト&デザイン」という4つの分野を英語で学ぶことができるようになる。これは「やまぐちスタディーズ」と言う。ご期待ください！

只今、『やまぐち文学散歩』

作成中！！ 山本 徳子（山口県文化振興課）

来年の早春、いよいよ『やまぐち文学散歩』が誕生する！（はずである。）現在、「産みの苦しみの真っ只中とでもいおうか…。

『やまぐち文学散歩』は、一昨年、昨年と続けて行った山口県を舞台にした文学作品の推薦文募集「みつけた！文学の中の山口」を踏まえ、山口を舞台にした文学作品50作品の紹介を中心に、「地域別の文学」や「山口の食べ物と文学」といったコラムなど、盛り沢山の内容でお届けする「やまぐちの文学作品」の案内本である。読んだ人が、その作品を読んでもたくなる、その土地に行ってみたくなる、また作品や文学者との繋がりをすることで、身近な風景や食べ物等に新たな魅力を発見できる本であり、この本を通して、やまぐちの文学をもっともっと身近に感じてもらえるようになることを願いながら作成している。

昨年4月の着任以来、この『やまぐち文学散歩』の作成を通して、実に多くの方々と出会い、その優しさ、誠実さに触れてきた。まだ途半ばではあるが、原稿の執筆、写真やイラスト、様々な情報提供等、既に50人以上の方々のお力を頂きながら進めているところである。『機雷』の作品紹介では、下関海上自衛隊から貴重な資料写真をご提供いただいた。また、『まぼろしの風景画』のために六連島の夕陽を撮り続けてくださった人がいる。文学関係者のみならず、多くの方々の思いが詰まったこの『やまぐち文学散歩』を無事生み出さなければならない。双肩にのし掛かるあまりにも大きなプレッシャーのためか、悪夢にうなされ、夜中突然目覚めることがある。「刊行が間に合わない！」「本の中が真っ白だ！」…。元来、楽天家の私だが、それでも、もうしばらくはこんな夜が続くのだろう。『やまぐち文学散歩』誕生のために、もう一踏ん張り頑張ろう。

明倫館初代学頭・小倉尚齋覚え書き

—『両関唱和集』に見る朝鮮通信使との交流

木越 俊介（当センター研究員）

享保四年（1719）創立の藩校・明倫館では数々の秀才たちが教え、学んだ。こんにちでは二代目学頭・山県周南の影にやや隠れがちであるが、初代学頭・小倉尚齋は学問はもちろんのこと、詩にも優れた作を残している。ここ数年、研究の一環として、御子孫のもとにお伺いしたり、関係資料を少しずつ読む機会があったので、ここに誌面をかりて、尚齋という人物とその業績の一端について、朝鮮通信使との交流を中心に紹介してみたい。

尚齋の伝記については、田中助一氏『防長医学史』下巻（一九五三）が最も詳しい。以下、これによりその前半生をまとめると、尚齋は延宝五年（1677）萩に生まれ、若い頃より学問を好み、十七歳から六年間の京都遊学を経、萩に帰り毛利吉広に書を講じたという。のち江戸に行き、林鳳岡（信篤）門に入るが、この時に朝鮮通信使と筆談し絶賛され名声が高まった。こののち明倫館の初代祭主（学頭）に迎えられている。

尚齋は享保四年、明倫館学頭就任の年にも再び朝鮮通信使と筆談しており、この折の記録が、『両関唱和集』（半紙本二巻二冊、享保五年、京都・唐本屋八郎兵衛梓行）の中に残されている。以下に尚齋の詩才や人柄がよく分かる箇所を一、二例抜き出してみよう。

尚齋は通信使に自己紹介する折、次のように記している。

年来萬慮灰冷（※） 唯だ詩魔（※） 猶未だ降ず 経を講ずるの暇に初盛中晩ノ絶句八千餘首を輯め 部を分こと三十五 巻を分こと二十五 題を命して『唐詩趣』と為す 芳洲之が序を為す 刊行我が邦に遍し 今芳洲巾箱の中にあり 請覧観を賜へ

「灰冷」は心が冷静で少しも欲念のないこと、「詩魔」とは、詩を好む病で、作詩の念を起させる不思議な力のこと。ここで触れている『唐詩趣』とは尚齋が好む唐詩を分類したアンソロジー（板本として一部現存）であり、学頭としての勤めの傍らライフワークとしていたようである。尚齋にとって生涯、詩は甚だ重要な位置を占めていた。

その詩作においては、たとえば、製述官として来日した申維翰の「詞案」（自己紹介の文）に応えた次のようなものがある。

○申学士ノ詞案ニ呈シ奉ル

獨主騷壇牛耳盟	独り騷壇牛耳の盟を主る
指揮風月發豪情	風月を指揮して豪（毫？）情を発す
文星影遶扶桑外	文星の影扶桑の外を遶る
鐵研雲生碧海傾	鐵研雲生して碧海傾く

おおよその内容は、「（あなたは）独り製述官の主となり 文才を操り思いのまま筆を走らせる 文運をつかさどる星の光は日本の外を回り 立派な硯が雲のわくように青海原を渡ってきた」となるうか。末尾の鐵研云々については、尚齋自身が注として、「公偶々五代ノ桑枢密ト諱ヲ同ウス 故ニ鉄研ノ事ヲ用ウ」と記している。すなわち、ここでいう「鐵硯」は、五代晋の桑維翰が「硯弊れざれば学を棄てじ」として勉学に励み、みごと進士に及第した、という故事から引かれたものであり、「維翰」つながりで相手の才を誉め称え祝しているのである。

尚齋と相まみえた申維翰は、自身の航海記録に次のように記している。

赤間関に留まること五日、諸文人と酬唱するところもまた多かった。語るにたるものはないが、ただ小倉貞といい、省（ママ）齋と号する人がある。（略）その人となりは、容貌端正にして行いは淳く、広く経史を涉獵して言論に愛すべきところがあり、その詩も往々にして眼に入るものがある。（略）余としばらく筆談し、詩を唱和することもまた数篇に及んだ。（姜在彦訳『海游録』、平凡社、1974）

尚齋は朝鮮通信使も一目置く存在だったのであり、その才のみならず人柄も敬すべき人物だったようである。

『両関唱和集』をはじめとする諸記録から、尚齋の文事や当時の国際交流の一端を垣間見ることができ、興味が尽きない。今後も小倉尚齋という碩学の魅力を探っていきたいと思っている。

寄贈図書

榑崎勤『作家の舞台裏』(読売新聞社、1970年)・榑崎鐵香『はぎやき』(盛運堂、1943年)

(以上、榑崎徹様より寄贈。)

白井江鷗『周防中の浦のななふしぎ』(文房夢類、2006年)・白井江鷗『周防徳地のななふしぎ』(文房夢類、2008年)・防府市立防府図書館利用者・サークル連絡会『防府図書館とともに歩むサークル活動記録集』(防府市立防府図書館、2007年)・伊藤雅子『水脈』(短歌新聞社、2005年)・中田美和子『中田美和子句集 雲ばかり』(喜怒哀楽書房、2007年)・中田美和子『人間として、女としてまっとうに生きたい』(喜怒哀楽書房、2008年)・新村出編『広辞苑 第六版(福田百合子先生傘寿記念)』(岩波書店、2008年)・斯波四郎・柴田小夜子『朴の花 斯波四郎生誕百年記念』(美研インターナショナル、2008年)・和田健『山頭火よもやま話』((山口県)、2008年)・上野燎監修『川口重美句集 復刻版』(「山繭」発行所、2008年)

寄贈雑誌

『中原中也記念館・館報』13(中原中也記念館)・『ほうふ図書館だより』227-239(防府市立防府図書館)・『図書館年報2007』(防府市立防府図書館)・『其桃』755-767(其桃発行所)・『季刊ふるさと紀行』112-115(ふるさと紀行編集部)・『ひとごち山口』4-5(山口県広報広聴課)・『萌』351-360(萌の会)・『文芸山口』276-281(山口県文芸懇話会)・『風響樹』36(風響樹同人)・『万象』72(万象発行所)・『颯』76-79(飄文学会)・『シュリンプ』9(しゅりんぷ詩舎)・『自由律俳句クラブ「群妙」』2-3(自由律俳句クラブ「群妙」)・『柳井短歌』263-265(柳井短歌会)・『火山群』46-47(岩国文学協会)・『郷土資料新着ニュース』36-38(山口県立山口図書館)・『県立図書館だより』151(山口県立山口図書館)・『07 現代山口詩選』44(山口県詩人懇話会)・『にぎめ』23(豊北郷土文化友の会)・『詩ぐる〜ぷ「たけとんぼ」』4(詩ぐる〜ぷ)・『風水譚』1(蒙談会)・『香臈人』17(香臈人短歌会)

編集後記 ▼センターだより12号をお届けします。▼巻頭には、本学国際文化学部のシャルコフ先生がご尽力されている「やまぐちスタディーズ」という教育プログラムについて、ご報告をお寄せくださいました。このプログラムには本センター研究員も積極的に関わっています。今後も文学・文化を通して、留学生と地域を結ぶ本学の21世紀にふさわしい内容になるよう、本センターとしてもバックアップしながら充実させていきたいと思っております。▼さらに、山口県文化振興課の山本徳子さんに『やまぐち文学散歩』の制作過程のニュースを御寄稿いただきました。盛りだくさんの本になりそうで今から楽しみです。刊行の際はどうぞお手にとってくださいようお願い申し上げます。▼センター研究員からは、明倫館の儒者についての報告を掲載しました。朝鮮通信使との筆談は江戸時代における異文化交流であり、地域から国際化を考えるという重要なテーマの一つであると思えます。▼本号からカラー印刷を試みました。版下は学内で作成しておりますのであくまで手づくりで垢抜けませんが、そこも「センターだより」らしさということでご寛恕のほどよろしく願いいたします。ただ、写真などは以前より鮮明にご覧いただけることと存じますので、寄贈資料などの紹介は以前にも増して力を入れていきたいと思っております。▼俳人・高橋飄々子の御遺族から貴重な関係資料を御寄贈いただきました。こちらは次号で詳しくご紹介いたしますのでご期待ください。▼編集にあたっては国際文化学部文化創造学科(企画プロデュース系)の山口光先生にアドバイスをいただきました。ありがとうございます。ちなみに当センター研究員は全員、昨年春から文化創造学科(日本文化系)のスタッフでもあります。▼当センターへのご意見・お気づき等、ございましたらお寄せ下さい。(K)

■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜畠 3-2-1)

TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251

■発行日：2008(平成20)年11月20日